

向精神薬と妊娠・授乳

改訂 3 版

編集：伊藤 真也（トロント小児病院小児科 臨床薬理/トロント大学医学部小児科 教授）

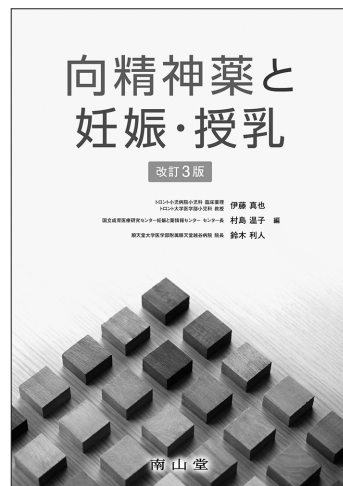
村島 温子（国立成育医療研究センター 妊娠と薬情報センター センター長）

鈴木 利人（順天堂大学医学部附属 順天堂越谷病院 院長）

最近、合併症をもつ女性の妊娠・出産が増加しただけでなく、合併症による母児への影響を最小限に抑える事例も多く報告されるようになった。これら予後の改善に関わるキーワードは、「適切な情報の活用」にほかならない。「産婦人科診療ガイドライン産科編」の普及や「妊娠と薬情報センター」の開設などによって、膨大な医療情報から有益な情報を抽出・統合し、発信されたものを、診療に活用した結果ともいえる。

合併症妊娠のなかで、対応が最も難しいのが、本書の対象である向精神薬を使用する精神・神経疾患である。疾患だけでなく使用する医薬品も多岐にわたり、胎児への影響が明らかとなっている医薬品、高い母乳移行率を示す医薬品も含まれている。さらに 60 年前のサリドマイドによる薬害が、いまだに暗い影を落としている。とはいえ、向精神薬を安易に避けた管理では、原病の増悪にとどまらず子どもたちにも悪影響が及ぶなど、ガイドラインや薬の情報のみでは、この領域の妊娠への適切な対応は期待できない。こうした領域の特殊性が、1 冊の書としてまとめたゆえんであるに違いない。多角的に俯瞰できる本書は、精神・神経疾患領域に関わる医療者に一条の光明を与えてくれることであろう。

研修中で、この領域の勉強を始めた医師やメディカルスタッフは、まず総論である第 1 章をじっくり読んでいただきたい。妊婦・授乳婦への医薬品投与の一般論から、精神・神経疾患患者へ投与する際の基礎知識が書かれており、この領域に精通したエキスパートの文章は腑に落ちる点も多いであろう。第 3 章の医薬品の各論については、小生も熟読はしていない。アウトラインだけを確認して、診療中に手の届く場所に置いておく。どのような内容が書かれているか事前に把握しておくだけで、実際には当事者と内容を確認しながら、方針決定に利用する。第 2、4 章では本格的な知識が増加・再確認できるので、気になる当事者がいた日は



B5 判/254 頁

定価：3,960 円（本体 3,600 円＋税 10%）

発行：南山堂（2023 年 4 月）

手に取って読み物として利用している。第 5 章は、臨場感もありドキュメンタリーを読むような感覚となった。

本書は初版から 10 年弱ですでに第 3 版の刊行である。日進月歩の医療情報に常にアップデートしているだけでなく、版を重ねて診療に役立つ本として、洗練されてきている。当事者と常に対峙しているエキスパートの執筆だからこそ、読者の心を打つ書になっているであろう。本書は、読者に疾患や医薬品の情報を提供してくれるガイドではなく、学問に立脚した指南書なのである。

順天堂大学 産婦人科学講座

板倉 敦夫